

「夢見がちな少年、それとも大人？」 『大いなる遺産』の語りについて

田村真奈美

チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens)の『大いなる遺産』(Great Expectations, 1860-1)の主人公ピップは、突然、成年に達したら莫大な遺産を相続することになり、親代わりであり「親友」でもある義兄、鍛冶屋のジョー・ガージャリーや幼なじみのピディと別れ、故郷を去って「紳士」(1)にふさわしい生活を送るべくロンドンへ出て行く。遺産相続への期待に浮かれたピップは、それまで自分に対して誠実に接してくれた人々を忘れ、また、自分に遺産を残してくれるのは故郷の金持ちの老婦人ミス・ハヴィシャムだと勝手に思い込んでいた。ところがその遺産の出所が、彼が子どもの時に故郷の沼地で出会った逃亡中の囚人マグウィッチであるとわかり、ピップは遺産相続を放棄し、愚かな野心家だった自分を悔いる。これがピップの「大いなる遺産相続の見込み(great expectations)」をめぐるプロットである。このメイン・プロットにおいて「途方もない期待(great expectations)」は崩れ去り、ピップはその虚しさを思い知る。またこの作品では、ピップのみならず他の人物たちの期待や夢も叶わぬことが多く、そのために『大いなる遺産』は、途方もない期待を抱いたり、白昼夢に浸ることの愚かさを主人公が思い知る「幻滅」の物語と考えられている。(2)

ところで、『大いなる遺産』は、年老いたピップ自身(フィリップ・ピリップ氏)(3)が過去を回想して記した自伝という形を取っている。ピリップ氏は、途方もない夢を追いかけて現実を見誤ったかつての自分の姿を、距離を置いて冷静に描き出す。過去の自分に対して向けられた批判的な語りの背後には、この自伝を通してピリップ氏が提示したい自己像が見えてくる。それはすなわち「過去から学んだ自分」「二度と同じ過ちを繰り返して虚しい期待を抱いたりしない自分」というものである。しかしこの語り手は、彼の語る物語の中のかつての自分と、最後まで距離を置いているわけではない。ピップの遺産相続の見込みが消えた後、自らの愚かさや俗物ぶりをさらけ出すような語りは次第に影を潜めてゆく。途方もない期待が破れて幻滅を味わった後のピップは、語り手にとってはもはや批判の対象ではなく、むしろ現在の自分に通じる存在だからなのだろう。こうして語り手ピリップ氏は自分の物語を語りながら自己を確認しているのだが、果たして語り手の示したい自己像と、彼の語る物語から読みとれる彼の姿は一致しているだろうか。『大いなる遺産』は、ピリップ氏がそれを通じて自己認識に至る自伝となり得ているのだろうか。

1

まず、ピップの'great expectations'が無に帰す過程を詳しく見てみよう。ピップは、親友ハーバートや憧れの女性エステラに指摘されているように、「夢想家(dreaming)」(234)で、「ロマンティック(romantic)」(236)で、「夢見がち(visionary)」(345)(4)だった。そのピップが初めて将来の夢、つまり、紳士になりたいという夢を持つようになったのは、まだジョーのもとで暮らしていた子どもの頃、ふとしたことからミス・ハヴィシャムの邸に呼ばれた日のことである。その邸で出会った美しく高慢な少女エステラに粗野な身なりや不法作をからかわれ、ピップは深く傷つくが、同時にその瞬間からエステラに対する憧れと自分の育ちを恥じる気持ちが芽生え、エステラに軽蔑されないような、彼女にふさわしい紳士になりたい、と思うようになるのである。そして、弁護士ジャガーズに謎の遺産相続の見込みを告げられたときに、その夢は突然現実のものとなる。

ピップの紳士になるという夢にはエステラの存在が深く関わっていたので、この夢が実現することになったとき、そして遺産を残してくれるのはミス・ハヴィシャムだと彼が思い込んだとき、彼は遺産相続の件にもエステラを関係づけずにはいられなかった。「ミス・ハヴィシャムはエステラを養女にした。私のことも養子にしたも同然だ。私達を一緒にするのが彼女の意向にちがいない。」(219)とピップは考える。こうしてピップの中で'great expectations'はミス・ハヴィシャムの「意向」、「計画」(219)と重ねられ、そこにはエステラと将来結ばれるという彼の希望も、何の根拠もないまま含まれるようになる。

ピップが遺産の贈り主について本当のことを知ったとき、'great expectations'は崩壊する。マグウィッチから財産は受け取らない、とピップが決心したからである。紳士になる夢は、実は流刑囚が流刑地で蓄えた財産に支えられていた。マグウィッチが過去にどんな罪を犯したのかわからないピップは、彼の手は血で汚れているのではないかと恐れる。また一方で、結局自分はこの囚人のためにジョーを棄ててしまったのだ、もうジョーとピディの待つ故郷へ帰ることはできない、と感じてしまう。紳士になるという虚しい期待を追っている間自分が顧みなかったものの価値を、このときピップは改めて思い知ったのである。一方、彼が'great expectations'に重ね合わせていたミス・ハヴィシャムの意向は「すべて単なる夢」(307)にすぎず、エステラは彼に与えられることになっていただけではなかった。

遺産相続を放棄して一文無しになってしまえば、エステラに対する希望も叶う見込みはない。夢から覚めたピップが認識した現実はかくも厳しく、語り手も虚しい期待に踊らされたピップをかばおうとはしていない。

ディケンズの作品における'expectation(s)'について、アニー・サドリン(Anny Sadrin)は、『オリヴァ・トゥイスト』(Oliver Twist, 1837-8)の頃には'expectations'という語は使われず、望みはすべて無批判的に是認され叶えられたが、後期の作品になるとこの単語が頻繁に現れるようになり、それも「欲(greed)」、「野心(ambition)」、「不合理な要求(illegitimtate claims)」の類義語として使われることが多い、と指摘している。また、'expectations'は「不吉な前兆の言葉」で、「しばしば破滅やプロットの皮肉な反転を引き起こす」とも述べている。(5)確かに『大いなる遺産』でも、'great expectations'を告げられたことが人生の大きな転機となって、ピップはそれまでの生活を棄てている。同時にそれが大いなる誤解の始まりでもあったわけで、ピップは期待に欺かれて、「本当の友だち」(66)であるジョーやビディの忠告を聞かずに、初めは「魔女」(79)に見えたミス・ハヴィシャムを、自分を成功へと導いてくれる「フェアリー・ゴッドマザー」(149)と思い込んでしまうのである。

ピップ以外の登場人物たちの'expectations'も見てみよう。この小説ではピップ以外の人物もそれぞれ期待を抱き、夢を語り、将来の計画を立てている。それが、たとえば村の学校で子どもたちを教えたいという、ビディの堅実で現実的な計画の場合には実現するが、「欲」や「野心」と言い換えられるような場合にはきまって失望が待っている。ミス・ハヴィシャムの財産を狙っていた親戚たち、爵位のある男性との結婚を願っていたミス・ポケットの期待がこれにあたる。さらに、失意の過去に対する復讐としてのミス・ハヴィシャムとマグウィッチの計画があるが、これもまた挫折する。婚約者に裏切られたミス・ハヴィシャムは養女のエステラを通して世の中の男たちに復讐しようとし、一方社会の底辺で暮らしていたために辛酸をなめたマグウィッチは、流刑地で築いた財産で「ロンドンの紳士」を仕立て上げ、その親代わりとなって社会を見返そうとするのだが、どちらも元にあるのは恨みと復讐の念である。ミス・ハヴィシャムの場合、エステラは期待通りに冷たい美女に育ったが、彼女は養母に対しても冷ややかだった。第四十二章でマグウィッチがコンピソン(ミス・ハヴィシャムを裏切った男であり、マグウィッチを罪の道に引き込んだ人物)について語る言葉、「あいつは鉄のヤスリも同様でハートなんかこれっぽっちもない。死人みたいに冷たい奴だ」(330)は、エステラについて繰り返される「ハートがない」、「石のように冷たい」を連想させる。ミス・ハヴィシャムはエステラを、自分を裏切った男のようにしてしまったのである。そして皮肉なことに、そのエステラにピップが傷つけられるのを見たミス・ハヴィシャムは、ピップに過去の自分を重ねて苦しむことになる。結局彼女は自分自身の計画に罰せられ、罪の意識に苛まれて許しを請いながら息を引き取る。マグウィッチの場合も、ピップ自身の意志とは関係なく、ピップを自分の計画のための道具として使ったという点では、エステラを復讐の道具にしたミス・ハヴィシャムと同罪である。危険を覚悟で秘かに帰国した流刑囚マグウィッチは期待通りに「紳士」になったピップを見て喜ぶが、事実を知ったピップが遺産相続を拒んだために、彼の計画も無に帰す。だが、彼の場合は自分の計画の失敗を知らないまま死んでゆく。これは、マグウィッチの計画が自分を虐げてきた者たちへの復讐であったとはいえ、彼がピップを相続人に選んだ動機には、かつて沼地で惨めな境遇の自分に同情してくれた子どもに対する恩返し of 気持ちもあったからである。ピップとマグウィッチの間には、エステラとミス・ハヴィシャムの間には生まれ得なかった情愛が生まれ、ピップはマグウィッチを失望させないように、遺産を放棄するという自分の意図を彼には明かさなかったのだ。

以上見てきたように、ピップ以外の人物にとっても、やはり期待は虚しく、叶えられることはない。(現実的なビディの計画について述べる場合には、語り手は'expectation'や'dream'という言葉は用いていない。)マグウィッチだけはピップの配慮により失望を味わうことがなかったが、実際に彼の計画が挫折していることには変わりがないのである。

2

しかし、『大いなる遺産』で繰り返される期待と失望のパターンには、一つだけ例外がある。ピップの親友ハーバートの場合である。彼の期待も夢のようで、およそ現実離れしているにもかかわらず、実現するのである。ハーバート・ポケットは、ロンドンへ出てきたピップと一緒に暮らすことになる若者である。初めてハーバートの下宿で彼に会ったとき、ピップは、彼には何とも希望にあふれたところがある、と感じるが、同時に彼はきっと出世したり金持ちになったりはしないだろう、とも感じる。お人好しで、陰であれこれ画策したり駆け引きすることは決してなく、財産も持たないハーバートが、現実社会で成功を収めるのは難しいと思うのはピップだけではないだろう。ハーバートの夢は資本家になり、自分の船で海外貿易をするというもので、ピップをして自分のよりも「もっと大きな期待('greater expectations')」(173)と言わしめるほどののだが、そのわりには欲がなく、ただいつの日か運が開けるのを待っているだけなのである。しかし、彼の夢は叶えられる。ピップがハーバートには内緒で、自分の財産と後にはミス・ハヴィシャムの財産で、彼の夢を実現してやるのである。ハーバートはまずまずの成功を収め、運が

開けるまでは結婚も叶わずにいた婚約者と結婚し、最後は、遺産を放棄して一文無しになったピップを助ける。ハーバートをめぐるプロットはまるでお伽噺である。ピップがすっかりロマンスの若き騎士になったつもりで、ミス・ハヴィシャムは自分を助けてくれるフェアリー・ゴッドマザーであり、思い姫であるエステラとの結婚をとりもってくれるのだ、と思い込んだ(219)ときには、お伽噺のような白昼夢に浸った彼を後に現実には手ひどく罰した。しかし、ハーバートは最後までお伽噺のプロットの中に居続ける。彼がお伽噺の世界にいることは、婚約者クレアラの描かれ方でいっそうはっきりする。クレアラには病気で寝たきりの父以外に身寄りはなく、この気難しい父の看病をしながら暮らしているが、その様子は「残忍な人食い鬼」に捕らえられた「妖精」のようなのである。(356)

このハーバートのお伽噺のプロットの存在をどう考えたらよいのだろうか。ピップはしばしばハーバートの明るさ、いつも希望を捨てない前向きなところに励まされている。ハーバートをめぐるお伽噺のプロットも、ピップの遺産相続をめぐるメイン・プロットをはじめとして、Great Expectationsというタイトルが皮肉としか思えないほど(実際皮肉なのだが)次々と期待が失望に変わる中で、唯一期待が叶う、現実離れした夢として、幻滅の物語に光を投げかけているように思われる。期待が虚しくも破れ、現実に引き戻されたピップは、ハーバートの夢の実現に一役買うことで、自らの叶わなかった夢の埋め合わせをした。語り手ピリップ氏もまた、自らの幻滅(とその感覚をさらに強める他の人物たちの幻滅)を語りながら、その中に成功も姫も手に入れるこの夢のようなハーバートのお伽噺を滑り込ませることで、現実には叶わぬ願望を「夢」の中で満たしているのではないだろうか。幻滅体験を語るピリップ氏は、過去の自分をお伽噺の主人公として描くことはできない。ピップには許されない夢を託されたのがハーバートなのである。しかしこれは、夢からすっかり覚めたはずの語り手が、ハーバートの物語を語りながら実は白昼夢に浸っている、ということにはならないだろうか。そうだとしたら、語り手ピリップ氏の内にはまだかつての夢見る少年ピップがいて、無意識のレヴェルで語り手の語る物語に影響を与えているのではないか。

ピリップ氏が、夢見るピップを自らの内にとどめているのではないかという疑いは、この作品の終盤の次の二つの場面ですらに強められる。一つはマグウィッチの死の場面(第五十七章)である。自分の財産でピップを紳士に仕立てるというマグウィッチの計画が挫折したことを、ピップがマグウィッチに最後まで知らせなかったことは既に述べた。さらに、マグウィッチが亡くしたと思い込んでいる娘が実はエステラだということを突き止めたピップは、死の床にあるマグウィッチに、彼の娘が今も生きていて立派なレディになっており、自分はその人を愛している、と告げる。(実際にはこの時点でエステラは別の男性と結婚しており、ピップの希望は潰れているのだが。)おそらくマグウィッチは、ピップが自分の財産を受け継いで紳士であり続け、レディになっているという自分の実の娘と結ばれる、という夢を見ながら息を引き取ったであろう。ハーバートの夢を実現させたピップは、ここではマグウィッチに夢を見続けさせている。周囲の人間に夢を見続けさせることが、ピップ自身の夢の代わりになるかのようである。

もう一つは、時間が前後するが、第五十一章で、エステラの出生の秘密についての情報を求めて、ピップがジャガーズと対決する場面である。それまでのジャガーズは徹底して現実的、職業的な人間として描かれている。ピップに忠告しているように「何事も見た目で判断してはいけない。証拠で判断するんだ。」(317)というのが彼のモットーである。虚しい期待や夢など抱くような人間とは思えない。職場ではひたすら事務的であっても、私生活ではお伽噺に出てくるような「城」に住んでいる部下のウェミックと違い、ジャガーズの場合は私的空間であるはずの家までが事務所の雰囲気漂わせていて、個人的な面を見せることがなく、ピップはとりつく島もないように感じていた。ところがこの第五十一章でジャガーズは、彼にも人間らしい感情があり、夢とも無縁でないことを漏らすことになるのである。

ピップはエステラの両親が誰であるか、知り得た限りの情報と直感から探り出したが、それを確実なものとするためにジャガーズの知っていることを話してほしいと訴える。そしてその理由を次のように説明する。

.....なぜ君はそんなことを知りたいのか、なぜそれを知る権利があるのかとお尋ねなら、あなたはそんな哀れな夢(poor dreams)など気にも留めないかもしれませんが、お答えしましょう。僕はずっと長いこと心からエステラを愛してきました。もう僕は彼女を失ってしまい、彼女のいない人生を送らなければなりません。それでも彼女に関わることは何でも、この世の何よりも僕には近しくて大切なものなんです。(390)

この後、ウェミックの隠された生活のことをピップから聞かされ、ウェミックに「個人的」な面があるとは思ってもみなかったジャガーズは動揺し、彼の「事務的」で「職業的」な仮面がはがれる。彼はここで初めて微笑みを浮かべ、ウェミックの「詐欺師」ぶりをからかうが、ウェミックにこう逆襲される。

「こうしてあなたを見ていると、あなたも近々、こんな仕事がいやになったら、自分の楽しい家庭を持つともくろんでいるとしても私は驚きませんよ。」

ジャガーズ氏は過去を振り返るように二、三度頷き、実に溜息をついたのだ。彼は言った。「ピップ、『哀れな夢』については話さないでおこう。君の方が私よりそういうことについてはよく知っているだろうから。そういう経

験をずっと最近しているのだからね(having much fresher experience of that kind)。」(391)(強調引用者)

右の引用部で、君の方がずっと最近そういう経験をしている、とあるところに注意したい。つまり、ジャガーズも過去には「そういう経験」をしているのだ。溜息をついたところを見ると、彼も自分がかつて抱いた感情を完全に忘れたわけではないらしい。この後彼は、エステラの母モリーを殺人罪から救い、幼いエステラを最下層の生活から救うために、養女を捜していたミス・ハヴィシャムに引き渡し、さらに精神的に打撃を被ったモリーを保護した経緯を語る。個人的な感情を見せることは弱みを見せることと感じる彼は、あくまで「仮定」として語るのだが、彼のこうした行為が単に職業上の必要からだけなされたわけではないことは明白である。さらに、ジャガーズはもう一度「哀れな夢」に触れる。「『哀れな夢』というのは君が考えているよりももっと多くの人の頭の中にあるんだ……。」(392-3)「哀れな夢」を抱いているのはピップだけではない。ジャガーズは「多くの人」の中に自分も含めているだろう。この作品の中で最も現実的で、個人的な感情など持ち合わせていないように見えるジャガーズも、実は「哀れな夢」の痕跡を心の中にとどめていたのである。

このように、白昼夢に浸ることの愚かさを思い知って現実的な大人になった自分を描こうとしているにしては不思議なことに、ピリップ氏は特に自伝の終盤で、夢を見続けながら死を迎える人間をあたたく見守るように描いたり、夢とは無縁かと思われた人物の内に過去の夢がその痕跡をとどめておくとほめかしたりしているのである。

3

フィリップ・ピリップ氏は過去を振り返って、そこから自分の物語をつくりあげ、そしてその物語を記しながら、自己を確認しようとしている。その自己像は、幻滅を体験し、醒めた目で現実を見つめられるようになった自分、となる予定で、Great Expectationsという皮肉なタイトルもそれを裏付けている。しかし一方で、語り手の内には夢見るピップが依然として存在していて、自伝の後半、ピップが幻滅を味わった後の部分においても、語り手は覚めたはずの夢へとどうも時折揺り戻されているようなのである。このような語り手は、一体どのように自らの物語を結ぶのだろうか。

『大いなる遺産』には二種類の結末がある(6)が、オリジナルの結末と現行の結末では語り手によって示される自己像が大きく変わってくる。まず、オリジナルの結末の方から見てみよう。最終章(第六十章)では、初めに十一年の年月が流れたことが書かれているが、結末部分ではそれからさらに二年が経過している。ピップとエステラはロンドンの街中で偶然再会するが、そこにはロマンスの入り込む余地はない。エステラは夫の死によって不幸な結婚から解放されたが、その後再婚しているし、ピップが連れていたジョーとビディの息子、リトル・ピップを、ピップの子どもと誤解している。再会した二人は悲しげに顔を見合わせたとあり、交わした会話はほとんど記されていない。語り手は、結婚生活の辛い体験が「彼女」に人間らしい感情を与え、今ではかつての彼が味わった思いを理解していることを確信できて嬉しい、と言って物語を終えるのだが、この結末では語り手はエステラを'the lady'とか'she'としか呼んでいない。エステラという名前が出てくるのは「あなたもエステラと握手したいんじゃないかと思ったのよ、ピップ」(461)というエステラ自身の言葉の中だけなのである。ピップの「哀れな夢」が再び彼の心を浮き立たせ、白昼夢に浸らせることは考えられない。ここでピップは完全に夢から覚めており、語り手も語りの中で見せていた夢への揺り戻しを克服して、最終的には冷静に現実を直視する自己を示し得ている。言い換えれば、語り手の内にある、彼の語る物語に影響を及ぼしていた夢見る少年の存在はもはや感じられず、予定通りの自己像が提示されて、彼の自伝は「幻滅」の物語として辻褃の合うようにまとめあげられているのである。

一方、現行の結末ではどうだろうか。オリジナルの結末とは違い、十一年が経過した時点で物語は終わる。ハーバートの仕事のパートナーとして外国暮らしをしていたピップは、一時帰国して、ジョーとビディのもとを訪れるが、ビディとの会話の中でピップは再び「哀れな夢」に言及する。ビディに、「彼女」のことはすっかり忘れたのか、と尋ねられたピップはこう答える。「あの、かつて僕がそう呼んでいた哀れな夢は、すっかり消え去ってしまった。ビディ、すっかり消え去ってしまったんだよ！」(457)しかし、現行の結末ではこれにすぐ続いて、「エステラのために」(458)(一度「彼女のために」とあった後で「エステラのために」と言い直されている)ミス・ハヴィシャムの邸の跡を訪れよう決心しているピップが描かれる。つまり、現行の結末では、ビディに言った言葉とは裏腹に、ピップの哀れな夢は未だその痕跡をとどめているのである。

銀色の霧がかかる夕暮れ時に、今は廃墟となっている邸の跡地を一人で訪れたピップは、そこでエステラと再会する。このときのエステラは、オリジナルの結末においてと同様、残酷な夫との結婚生活という試練を経て、痛みのわかる人間に変わっている。しかし、オリジナルの結末のエステラが馬車から降りずに、召使いを遣ってピップを呼び止めさせ、最後まで馬車の中からピップに話しかけているのに対し、現行の結末のエステラはピップと共にベンチに座り、オリジナルの結末のエステラよりも多弁でやや感傷的である。(「かわいそうな、かわいそうな、懐かしいお

屋敷！」「よくあなたのことを考えていたのよ。……最近は本当にしょっちゅう」(459) ピップの反応もエステラの態度に呼応して、また、薄い霧のかかる月夜の廃墟というロマンティックな場所にも影響されて、すっかり感傷的になっている。「僕にとっては別れは辛いものなんだ。僕にとっては、この前の僕たちの別れの思い出はずっと悲しい、辛いものだったんだよ。」(460) ピップの哀れな夢はすっかり息を吹き返し、彼は再びエステラに対して希望を抱き始める。「離れていても友達でいましょうね」と言うエステラの手を取って、ピップは彼女と廃墟を出て行くが、語り手はこう物語を締めくくる。

私は彼女の手を取り、二人で廃墟を後にした。そして、昔私が初めて鍛冶場を離れたときに朝霧が晴れていたように、今また夕べの霧が晴れかけていた。そして霧の向こうに見える静かな光の広がりの中に、彼女との再度の別れの影は見えなかった(I saw no shadow of another parting from her)。 (460)

この曖昧な言葉で終わる結末を、ピップとエステラの将来の結婚を暗示するハッピー・エンディングと見る見方もあるが、しかし、二人が現実には結ばれるだろうとは考えにくい。二人が誓ったのは友情だけで(とはいえピップの方は誓いに多分に愛情を忍ばせているようだが)、エステラの言葉はあくまでピップとの別れを前提にしている。またすでに指摘されているように、このフィリップ・プリップ氏の自伝には、もし彼がエステラを妻にしているのなら出てこないような表現が随所に見られるのである。(7) この結末が確かに示しているのは、ピップが再びエステラに対して希望を抱き始めたということである。「彼女との再度の別れの影は見えなかった」というのは、「彼女と別れることはなかった」と断定しているわけでもなければ、現実を客観的に分析した結果導き出された将来の展望を示しているのでもない。先を見るピップの視線には、彼の希望、期待が投影されているのであって、ジャガーズなら、また希望的観測に欺かれる危険を冒しているピップに苦言を呈するところだろう。現行の結末では、ピップは最後に再び夢見るピップに戻っているのである。

このように、現行の結末では語り手の予定していたであろう自己像が崩壊している。ピーター・ブルックス(Peter Brooks)はこの点で現行の結末を批判し、「すでに完全に閉じ込められ、実際テキストから放出されたといわれわれが思っていたエネルギーを解放してしまう」(8)と言っている。フロイトの精神分析の理論を応用して『大いなる遺産』を解釈したブルックスは、この作品においてピップが最終的には「治癒する」と読んでいるため、オリジナルの結末を支持しているのだが、治癒しない可能性を読みとることはできないのだろうか。ブルックスはハーバートのお伽噺のプロットを無視しているが、このお伽噺の存在が、語り手の内には夢見る少年が抑圧されながらも存在し続けていることを示しているのであり、予定している自己像の提示に語り手が最終的には失敗するかもしれない可能性を暗示しているのである。そして現行の結末では、ついにピップは現実を見つめることをせず、再び夢を見始める。ブルックスに倣って言えば、語り手の内に抑圧されていた夢見るピップが解放されてしまうのである。その結果、語り手の示したい自己像と、彼の語る自己の物語の結末が一致しなくなっているのだ。

オリジナルの結末については、都会の雑踏の中でのピップとエステラの再会とその場に強く感じられる孤独感のために、その現代性が指摘されている。(9) その点、現行の結末の舞台設定はゴシック風(10)ということになってしまうのだが、語り手の提示する自己像の崩壊ということを考えれば、現行の結末にも現代性を見てとることができるのではないか。自伝という自分についての物語の中で、自己の同一性を語り得たのがオリジナルの結末の語り手だとしたら、現行の結末は、結局自分の物語に意識的な決着をつけられずに終わる、同一性を確立できない語り手の姿を見せている。自己同一性(アイデンティティ)の危機が現代人の問題だとするなら、現行の結末での語り手こそわれわれに近い存在なのではないだろうか。

ディケンズがオリジナルの結末をキャンセルし、現行の結末に書き直したことは興味深い。現行の結末の解釈がさまざまあるように、この変更についてのディケンズの意図もまたさまざまに推測されている。(11) ハッピー・エンドを期待する周囲に対する配慮は当然あったであろう。しかし語り手の問題に注目してみると、物語を語ることで円満に自己認識に達したことを誇示する語り手に、作者ディケンズ自身が違和感を覚えたためではないか、とも考えられるのである。

註

1 『大いなる遺産』の中で「紳士(gentleman)」という言葉は、ハーバート父子が用いるときの生まれや財力よりも人格面が重視される「紳士」と、マグウィッチが用いるときの労働に手を染めず裕福な暮らしをする者としての「紳士」を両極端として、人物によって微妙に異なる意味で用いられている。ピップは、教育を受け、作法を学び、財産を蓄えれば紳士になれると思っているようだ。

松村昌家編『チャールズ・ディケンズ『大いなる遺産』 読みと解釈』(英宝社、一九九八)、第一章「アイ

ロニーの構造」参照。

2 たとえば、G・K・チェスタンは「彼 [ディケンズ] のすべての本はGreat Expectationsと呼べるだろう。しかし、彼が唯一Great Expectationsという名を与えた本が、唯一expectationが実現しない本だった。」と述べている。

G. K. Chesterton, *Chesterton on Dickens: Criticism and Appreciations* (1911; London: Dent, 1992), p. 200.

3 本稿では、自伝執筆時のフィリップ・ピリップ氏の年齢については、David Paroissienの計算による六十三～四歳という説に従った。

David Paroissien, *The Companion to Great Expectations* (Westport, Connecticut: Greenwood Press, 2000), pp. 423-434.

4 Charles Dickens, *Great Expectations, The Oxford Illustrated Dickens* (Oxford: Oxford University Press, 1987). 以後、引用のページ数はすべてこの版による。

5 Anny Sadrin, *Parentage and Inheritance in the Novels of Charles Dickens* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994), p. 112.

6 『大いなる遺産』の結末は、いったん書き終えられた後で、ブルワー・リットンの助言を受けて書き直された、という経緯がある。どちらの結末がよいか、という議論は、この書き直しの事実が明らかにされて以来ずっと現在まで続いている。また、現行の結末についてはその曖昧さからさまざまな解釈がなされている。

Cf. Edgar Rosenberg, 'Putting an End to Great Expectations', Edgar Rosenberg (ed.), *Great Expectations, Norton Critical Edition* (New York: W. W. Norton & Co., 1999), pp. 491-527.

田辺洋子『チャールズ・ディケンズ作『大いなる遺産』研究』（広島経済大学地域経済研究所、一九九四）、第四章。

7 田辺、一二四～五頁。

田中孝信「母性への渴望」、『チャールズ・ディケンズ『大いなる遺産』読みと解釈』第九章、二七一～二頁。

8 Peter Brooks, 'Repetition, Repression, and Return: The Plotting of Great Expectations', in *Reading for the Plot: Design and Intention in Narrative* (New York, 1984). Reprinted in *Great Expectations, Norton Critical Edition*, p. 687. なお、ブルックスが用いているフロイトの精神分析の理論については主に次の資料を参考にした。

今村仁司、三島憲一、鷲田清一、野家啓一『現代思想の源流 マルクス、ニーチェ、フロイト、フッサール』（講談社、一九九六）、第三部。

小此木啓吾『フロイト』（講談社学術文庫、二〇〇〇）。

『フロイト著作集』第三巻（文化・芸術論）、高橋義孝他訳（人文書院、一九六九）。

また、物語と無意識、物語と自己認識の関係については、次の資料からも得たところが大きい。

『無意識の発見』岩波講座 現代思想 3（岩波書店、一九九八）。

A・ストー、河合隼雄訳『ユング』（岩波現代文庫、二〇〇〇）。

C・G・ユング、松代洋一訳『創造する無意識』（平凡社ライブラリー、一九九九）。

9 Cf. Kate Flint, *Introduction to Great Expectations, Oxford World's Classics* (Oxford: Oxford University Press, 1994), p. xx.

田辺、一四二頁。

10 Flint, p. xx.

11 ディケンズ自身は結末の変更について、'Upon the whole I think it is for the better.'（一八六一年六月二十三日付ウィルキー・コリンズ宛の手紙より）'...I have no doubt the story will be more acceptable through the alteration.'（一八六一年七月一日付ジョン・フォースター宛の手紙より）と説明している。Cf. Graham Storey (ed.), *The Letters of Charles Dickens, vol. 9* (Oxford: Clarendon Press, 1977), pp. 428, 433.